ガ如シ、此ヲ斤ト云フハ開元錢一文ノ重ヨリ起リタルモノニテ、分ハ即チ錢ノ字ナリ、而シテ斤兩ニ京目田舍目ノ區別、又ニ唐目、大和目等ノ區別アリ、

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕商長首　吳櫃、○中略其名云波賀理、

〔倭名類聚抄十四稱量〕權衡　兼名苑云、銓音全一名衡稱也、楊氏漢語鈔云、權衡、加眞波可利

〔易林本節用集波〕權衡

〔書言字考節用集七器財〕秤正斤音僞、通銓、同廣雅稱銓謂之銓等子

〔塵添壒嚢抄五〕秤事　附權衡門事

ハカリハ何ノ字ゾ、秤稱又稱權衡皆ハカリトヨム也、魁本對相四言雜字ト云物ニ、ハカリノ繪圖ノソバニ秤字出ス、玉篇ニハ無之、三寶字類ニハ、秤ヲ俗字ト注シテ、稱ヲ本ニ出ス、又玉篇ニ秤字ヲ載スル本アリ、字注三寶ニ同ジ、韵會ニハ秤與稱同ジトシテ、至下權衡之稱ト云云、仍權衡ヲモ、ハカリニ用也、權衡ハ、ハカリノ形歟、常ニ左右折尺ト云門ヲ權衡門ト云也、唐稱ニ似タルガ故也、拜ヲモハカルトヨム、五斗ヲ斜ト云也、

〔成形圖說十四稱延喜式、蓋大小に通ずるの名なり、日本寄語に等子波介俚と譯す、今俗に農事二百以上の物をはかる、又天平と云、即秤なり、加良盤等を波加利と云、大抵

波加利　漢語鈔に權衡を訓めり、按に姓氏錄云、商長首上毛野、同氏多寄波世三世孫久比、崇峻御世賜二吳國一、雜寶物爲二交易一、其中有二吳櫃一、其名云二波賀理一、久比奏曰、吳國以懸二定萬一と云、其名を波賀理と云は、此間の人名づくる所、是即加眞波加利なるべし、　知伎利　即小秤なり、關東にては伎を濁音に呼べり、秤等秤は宋太宗淳和中初て製ところ也と云、

〔日本書紀推古二十一年四月〕是時高麗國大興王、開二日本國天皇造一佛像一、貢上黃金三百兩、

〔日本書紀二十六齊明〕五年、○中略是歲高麗使人、持二羆皮一枚一、稱二其價一曰、綿六十斤、

〔日本書紀二十七天智〕元年正月丁巳、賜二百濟佐平鬼室福信一、矢十萬隻、絲五百斤、綿一千斤、布一千端、

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年四月乙亥、分二天下諸國一、改二駄馬一匹所一レ負之重大二百斤一、以二百五十斤一爲レ限、

〔東大寺獻物帳〕

全淺香一村重大卅四斤　寺權秤定卅三斤五兩

御鏡貳拾面

八角鏡一面重大卅八斤八兩徑二尺一寸七分　八角楯匣盛　鳥獸花背

圓鏡一面重大卅三斤八兩緋繩帶徑一尺五寸八分　鳥花背

〔萬葉集五雜歌〕筑前國怡土郡深江村子負原、臨二海丘上一有二二石一、大者長一尺二寸六分、圍一尺八寸六分、重十八斤五兩、小者長一尺一寸、圍一尺八寸、重十六斤十兩、並皆橢圓狀如二鷄子一、

〔皇大神宮儀式帳〕一年中三節祭時供給儲備幷勞作雜器事

九月例

糸免稅稻一千四百卅七束

半斤細稅二百廿束以二一把一束一大半斤百八十束以二五把一束一大斤千卅七束、

度會郡九百廿束　多氣郡廿束　神麻續百束大半斤　細稅百束、神服織八十束大半斤　細稅八十束、飯野神戸十一束大半斤　細稅十束、

〔止由氣宮儀式帳〕一新宮奉二造時行事幷用物一事

次取二吉日一、山口神祭用物幷行事如左、○中略

木綿二斤小　麻二斤小

〔延喜式五齋宮〕造備雜物

薦小一斤、白薦大四兩、鍊金小十、一兩一分、二銖、銀大五斤十、一兩、水銀小五斤三兩、

〔薫集類抄〕黑方

六朱を一分とす、四分を壹兩とす、十六兩を小の一斤とす、卅八兩を大の一斤とす、小の三兩を大の一兩とす、小の三分を大の一分とす、もし少しあはせんと思はゞ、これらをつもりてあはすべきなり、

〔古今要覽器財〕延久宣旨秤

延久に宣旨秤といふものを作られたるよし愚管抄いへど、それより九十年許のゝち長寛の頃、刑部卿範兼卿のかゝれし、藁集類抄にしるされし權衡、大寶令延喜式の大小兩とたがふことなければ、延久の度には、新に法を設けられしにはあらざるか、

〔伊呂波字類抄波良數〕斤　ハカリ　稱同　黍爲二一銖一、輕重二也、俗作レ秤、正二斤兩一也、稱之所レ起、起二於黍一、十黍爲レ絫、絫十、六銖爲二一分一、四分爲レ兩、十六兩爲レ斤、卅斤爲レ鈞、四鈞爲レ石、

〔拾芥抄下末物充〕物充　斤目有二大小一、所レ謂水精　胡粉　青木香　白鑞　金　銅鐵　絲　綿　紅　青　陶砂　蘇芳已上爲二小目一、

六銖爲二一分一　四分爲二一兩一　十二兩爲二一屯一　十六兩爲二一斤一　十一斤也　三斤爲二大一斤一　四十八兩也　大十斤爲二稻一束一束一斗米卷五升　十撮爲レ勺　十勺爲レ合　十合爲レ升　十升爲レ斗　十斗爲レ石　十釐爲レ毫　十毫爲レ分　十分爲レ把　十把爲レ束　今案世俗誦曰　六銖一分　四分爲二一兩一　十六兩爲二小一斤一　四十八兩爲二大一斤一　是近俗耳

○按ズルニ、十毫爲レ釐、十釐爲レ分ノ誤ナリ、蓋シ小數ノ准位ハ、分釐毫絲忽微纖沙塵埃ナレバナリ、

〔書言字考節用集十數量〕一貫　イックワン　千錢目也、其重猶二錢十貫一也、十分之量、重如二錢十文一、故文之義、活法十百爲二十貫一、一ノ則一錢也、支那俗、借二喪葬一制レ之字、自呼爲二錢音一

〔梅園日記五〕爲字

月堂夜話に、銀何爲ト書、正字ハ文目ヲヤッシタル者ナリ、一說ニ爻ノ字ノ內ヘ、片假字ノメノ字ヲ入タルナリ、數學夜話、亦此說あり、按ずるに此說非なり、爲字は錢字なり、もろこしの書に出たるをこゝの人も記しおけり、○中略清の畢沅ガ中州金石記、宋の慶歷三年、淮源廟錢鐘識に、下列拾錢捨爲人名、錢字作爲見于此、或云泉字草書、○中略畢沅ガ或云といへるは、明の趙宧光ガ說文長箋に、泉草作爲とあるをさせるなるべし、

○按ズルニ、泉貨鑑ニ、明ノ崇禎通寶ノ背文ヲ擧ゲテ一爲トアリ、亦一錢ナルベシ、

〔金石萃編金一百五十七〕圓覺禪院鐘款

按圓覺禪院、今名圓覺寺、在韓城縣北門外、○中略此鐘○金承安四年所鑄、周刻僧名及助緣男女姓名二百餘人、今俱不錄、○中略又有書人氏者二人、人氏者當卽錢字、俗書省文已見於此、併識之、

〔南浦文集上〕修葺石體宮文

正八幡大菩薩靈廟、艮方有石體、石體有四句刻文、○中略妙文出現之後、營二一社於石體上、○中略然而歷數十星霜、風雨壞籓隙矣、是可忍乎、今執行大宮司助長、行以扣村々民家之門、欲受溢米半錢之樂施、以修葺籓隙矣、有司奏之於龍伯○島津義久君、尊君平日瞻之仰之者不爲淺矣、況復感執行助長之志也、施數萬爻以爲助緣、

〔大內家壁書〕金銀兩目御定法之事

こがねしろかねの兩目之事は、京都の大法として、何れも一兩四文半錢にて、二兩九文目たる處、こがねをば一兩五爻にうりかふ事、そのいはれなし、殊に御分國中如此云々、代はたかくもやすくも、其身々々のはからひたるべし、兩目の事は京都の法をまもるべし、若此旨を背やからあらば、經上裁罪科有べし、自然又此沙汰を破輩を聞出事あらば、慥遂糺明、其科不遁者重科にをこなはるべし、仍下知如件、

文明十六年五月日　　參河守重行判

〔元祿板〕新編塵劫記三〕第十二金銀千枚を開立にしてつもる事

金千枚のおもさ四、十、四貫目有、是を百七十五爻にてわれば、一寸四方の坪二百五十一坪四分二厘八毛五絲七忽一とゝなる、

〔早算法〕くり綿、金壹分ニ付何程と問、定法の六九七五を實として、拾駄の代金を以割ば、何百何十目と知る、

〔板元緑〕新編塵劫記〔一見〕一掛算
あるひは銀六匁二分五厘ヅヽ十六あはすれば、百目になる也、
〔板元緑〕新編塵劫記〔一見〕九圖
あるひは銀二百卅七貫五百八十三匁五分を、九千五十石八斗にわれば二十六匁二分五厘ヅヽ
也、
〔板元緑〕新編塵劫記〔一見〕八圖
あるひは銀八十四貫九百八十二匁九分八釐を八千六百五にわれば、九匁八分七厘六毛ヅヽ也、
〔甲斐國志二國法〕秤子
古へ秤ニ京目田舍目ト云事アリ斤兩ノ數今未詳、淺野左京文祿五年正月廿八日、與野中新兵衛
印書野中金座ナリ、金壹兩者京目五十枚金四兩貳分壹朱（ハヤカ）爲中目（ナカノメ）貳百枚之出目
ナリハ爲中目（ナカノメ）、延引請取候也トアリ、按之京目方強シト知ベシ、但是ハ本州ニ限タル名ニハ非ズ、
昆陽漫錄ニ載スル所、

北條陸奥守平氏照内
由木左衛門尉景盛

天正六年戊寅三月拾七日

拜遣高野山龍光院之内宗忍坊

二親爲成佛、高野山月牌奉納之、但黃金貳兩京目國宗刀長二尺三寸、
今本州ニ所用斤兩ハ、凡物百六拾目ヲ壹斤通例ナレドモ、藥種類產本州者、貳百目或貳百三拾
目ヲ爲壹斤、煙草ハ貳百目壹斤ナリ、謂之西目、重目、又龍王目、其餘煙草ハ皆
百六十目ナリ、木綿ノ實アルヲ粒（ツブ）モメント云、六百目ヲ爲壹斤、貳拾斤ヲ爲壹本、棄俵ニ入繰（クリ）綿壹
斤ハ三百目ナリ、貳斤ヲ爲壹玉、拾玉ヲ謂壹本、六貫目ナリ、直江ハ甲金壹兩ニ木綿ハ何斤、又云（何把）ニくり
り綿ハ何貫何百目替ヘトト云、（土地ニヨリ木綿壹斤ニくり綿百五六拾目ア
貳百目ヲ得ルナリ、直ニモ自ヲ高下アリ、）

〔金銀圖錄一用品〕一水戸藥王院天正年間古文書ノ內（此書年號ヲ失ストイヘドモ、信長ヘ兩
僧正口宣之爲御禮禁裏樣ヘ黃金三兩、田舍目、御門跡樣ヘ同貳分、院家ヘ同貳分、御進上候、
一同文書ニ
來春早々可被調進御禮物書立
金壹枚京目　禁裏樣
同五兩同　親王樣
同壹兩　御あちや〳〵樣
同壹枚　御門跡樣
同三兩此內貳兩京目　同民部丞
同壹分　伊勢丞
以上六枚九兩三分歟
右之外、三兩一分一朱、信長ヘ兩度御音信、鳥羽小路失墜仕候、此方ヘ可被相渡分如斯候、
〔地方新書〕今量一升（ハ十三勺の重を十二錢（一錢は十分を大一兩とす、）とす、其十二分の一を一分とす、
十錢）十六兩を大一斤とす、（百六十錢也）俗に唐目、又黑目と稱す、今普通に用ゐる所のもの是なり、是一種
の衡法也、
〔地方新書〕一種藥舖にて、大和目と云あり、百八十匁を以て斤とす、地黃當歸等、此斤を用ゐる也、凡
九六量大一斤の目なり、是穗井田忠友の目撃せしと云、法隆寺東大寺等の、古器の斤兩と符合す、
大和と云は日本（ヤマト）と云義にて、百六十匁を唐目と云に對へし名ならんか、山椒は六十匁を一斤と
すと云へば、こは大和目の小斤の名殘なるべし、
自餘二百錢を一斤とするあり、之を口目と云、又二百十匁を一斤とするあり、之を沈香目と云、又

二百三十錢を一斤とするあり、之を白。目。又輪目と云、藥舖にて專ら之を用ゐる也、又二百五十錢を一斤とするあり、之を山。目。と云、諸國より大坂に輸送する藥品の類、多くこれを用ゐるなり、紅花は百匁を一斤とし、五倍子は百三十匁を一斤とす、木綿に平。野。目。煙草砂糖に、大。坂。西。國。備。後。等。の目。あり、茶に宇。治。目。二百目也 山。目。里。目。等あり、此外も猶多かるべし、其異同の來由もあるべけれど、畢竟商賈の私に稱するものは、徵とはしがたし、今漢土產物をはかるに、四錢を一兩とし、白銀は四匁を三分を一兩とす、

〔雍州府志六土產〕茶　凡本朝貴茶也舊矣、○略中凡宇治中十一家茶師、納公方家之茶於壺而獻之、其餘各所製之茶、或一袋、或二袋、納十一家所詰之壺內、是謂御通、倭俗不能獨立、而逐隊連屬、是謂通周密、納物曰詰、至茶特密、極茶十錢目、納小紙袋、壹雙謂壹袋、故袋壹箇稱半、凡小袋二十、則約壹斤、而其重二百目也、極極品之謂也、

○按ズルニ、此ニ云ヘル二百目一斤ハ、所謂宇治目ナリ、

〔經濟錄四律歷〕日本ノ古ノ秤ハ、如何ナル制ナリシト云コト詳ナラズ、○略中異國ニテハ十錢ノ重サヲ一兩トシ、十六兩ヲ一斤トス、一斤ハ百六十錢也、斤ヨリ以上ハ幾斤ト數ヘ、斤ノ下ハ幾兩幾錢幾分ト數フルコト、金銀藥物糸綿□□何ニテモ輕重ヲ以テ數フルモノハ皆此類ヲ用フ、日本ニテハ物ニ隨テ斤兩同カラズ、黃金ハ四錢入分ヲ一兩トス、銀子ハ四錢三分ヲ一兩トシ、餘ノ諸物ハ大抵四錢ヲ一兩トス、或ハ五錢ヲ一兩トスル物モアリ、斤ニ至テハ百六十錢ヲ一斤トスルハ通法ニテ、二百錢ヲ一斤トスル物モアリ、二百三十錢、或ハ二百五十錢、或ハ三百錢ヲ一斤トスルモアリ、尋常ノ粗大ノ物ハ斤ヲ以テ數ヘズ、只十匁百匁ト數ヘテ、千匁ニ至レバ一貫目ト數ヘテ、其上ハ百千萬貫匁ト云フ、貫ハスナハチ錢ノ字ナリ、カクノ如ク幾匁ト數ヘテ上ルハマギラハシキ事ナシ、斤兩ニテ數フルモノハ、上ノ如ク斤兩ニ不同アル故ニ、常ノ人惑ヒヤスク、姦猾ノ民、欺詐ヲナシヤスシ、異國ノ如クニ、斤兩ヲバ一同ニ定メラレンコト、敢事ノ便利ナルベシ、

〔令義解十雜令〕凡○中略權衡廿四銖爲兩、謂以秬黍中者百黍重爲銖、廿四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤、

〔唐律疏議二十六雜律〕雜令、○中略秤權衡、以秬黍中者百黍之重爲銖、二十四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤、

〔本朝度量權衡考權衡〕本朝令ニ、權衡廿四銖爲兩、本注三兩爲大一兩、十六兩爲斤、義解ニ、謂以秬黍中者百黍之重爲銖、二十四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤、ト云ヒシニ因リ給ヒシナリ、古器ノ權衡ノ證トスベキ者今存セズト云ヘドモ、好古小錄ニ、天平以來ノ器ニ斤兩ヲ題シタルハ、皆今ト同ジト云ヒタルハ、通典ニ武德四年廢五銖錢、隋ノ五銖錢ナリ、鑄開元通寶、每十錢重一兩、計一千重六斤四兩二十四銖、則一錢重二銖半以下ト云ヒ、舊唐書ニ開元通寶錢、重二銖四絫、積十文重一兩、一千文重六斤四兩ト云ヘバ、イヅレモ大稱ニ開元錢ニヨリテ計リシナリ、然ラバ今ノ一匁ハ、唐ノ大稱ノ二銖四絫ニシテ、即宋以後ノ一錢ナリ、宋ノ時、二銖四絫ヲ一錢トシ、二絫四黍ヲ一分トシ、ヨリ出タルニカ詳ナラズ、或人ノ云ヒケルハ、拂ハ忽ノ訛音ニテ、ソレヲ誤リテ、豪ヲ十分ノ一トシ、絲忽ト稱ルコトハ、度ノ小數ノ名ヲ借リタルナレバ、上件ノ事ドモ度考ニ云フルニ如ヒハ云ヘルナリ、

制度

稱量部三　權衡　一一五

銖黍　三百　今四分一錢、六豪六絲六忽不盡、蘂或ハ蘲字ナド借用フ、俗省テ厘ニ作ル、干錄字書ニ厘ノ上通下正ト云フ、豪字ヲ俗ニ毫ニ作ル故、ソレヲ省キシ者ナルベシ、今俗一絲ヲ一拂ト云フ、此名何ニ因リシヤ詳ナラズ、或人ノ云ヒケルハ、拂ハ忽ノ訛音ニテ、ソレヲ誤リテ、豪ヲ十分ノ一トシ、絲忽ト稱ルコトハ、度ノ小數ノ名ヲ借リタルナレバ、上件ノ事ドモ度考ニ云フルニ如ヒハ云ヘルナリ、

兩　七千二百黍　今ノ十匁通典ニ、每十錢重一兩ト云ヒシハ、即是ナリ、按ズルニ、說文ニ兩、二十四銖爲一兩ト云ヒシハ、兩再也ト云ヒアリテ、二字同ジカラズ、後世ハ皆兩ニ作リテ、兩字ハ廢レタリ、

斤　一萬二千一十一黍　五今ノ百六十匁モ、後世ハ銖絫ヲ廢シ、錢分ヲ以テ諸物ヲ稱レドモ、斤ト兩トハ、唐ノ稱法ヲ變ズルコト無シ、

是雜令ニ三兩爲大一兩ト云ヒ、量銀銅穀者、皆用大ト云ヒシ大稱ニテ、六典延喜式等ニ藥ヲ合スル外ハ、悉大ナル者ヲ用フト云ヒシモ此稱ナリ、小稱ハコノ三分ノ一ナレバ、

鉄百黍今一分三麁八豪八絲八忽不盡
兩二千四百黍今三朱三分三麁三豪三絲三忽不盡
斤三萬八千四百黍今五十三朱三分三麁三豪三絲三忽不盡

〔古今要覽器財〕令大兩　小兩

大寶令の權衡は黍二千四百粒の重さを壹兩とし、十六兩を壹斤とし、四十八兩を大壹斤とすること、唐の權衡とおなじ、是を量に比するに、壹合の黍は、十黍一萬二千粒にして、小五兩の重さなり、雜令是を今黍に考ふるに、大寶小壹合、今の壹勺四撮五有奇にあたる、壹勺四撮五有奇の黍の重さ、今秤五錢八分有奇にあたり、五錢八分有奇に三を乘じて、十七錢四分有奇にあたる、是大一合の重さなり、此を五分して、小壹兩をもとむれば、今の三錢四分八麁有奇にあたる、此黍二千四百粒の重さなり、黍の大さ百粒にして、横黍尺壹尺にあたるものをさす、普通の黍ば百粒曲尺の七寸二三分に過ず、用ゆるにたへず、是を小壹兩として三を乘じ、大壹兩をもとむるに、十錢〇四分四厘有奇にあたる、また是を度にもとむるに、方壹寸に分積一千あり、即黍千粒に比すべし、千粒は十銖なり、よつて横黍百粒尺（即今小曲尺の八寸三分有奇、）の方寸を大尺（即今曲尺、）にもとむれば、方八分三麁有奇にして、分積五百七十八分、〇九五有奇にあたる、即小尺の千分なり、水を以て準とし、この方寸の重さをこゝろみるに、四錢四分六麁有奇なり、是を十銖として一銖をもとむるに、今の四分四麁六毫有奇にあたる、二十四を乘じて十錢〇七分〇四毫有奇をうる、是黍にもとめたる十錢〇四分四麁有奇と、僅に二分六厘を差ふ、是共に唐秤を求むる法にして、六典及び皇朝雜令と相同じ、法隆寺に現存せる銅升に、大廿六斤の銘あり、今秤に校するに、三貫三百目あり、二十六歸して一斤なりともとむるに、今秤の百目に洽ふ六ゑ九分二麁三毫有奇にあたる、けだし鑞落底破れたればこの斤兩證とするにたらず、

〔令義解十〕凡度地量銀銅穀者、〇中皆用大、此外官私悉用小者、
〔延喜式五十〕凡度量權衡者、官私悉用大、但測晷景、合湯藥、則用小者、
〔令義解十雜〕凡用度量權官司、謂大藏省及諸國司之類、皆給樣、其樣皆銅爲之、
〔令義解九關市〕凡官私權衡度量、每年二月、詣大藏省平校、〇中不在京者、詣所在國司平校、然後聽用、〇義解文見度篇、
〔類聚國史八政理十〕延暦十七年十月乙未勅、〇略、中權衡先有定製、平校行用、亦具令條、然所司怠慢、曾不遵行、大小任意、輕重由人、收納多濫、蠹害尤甚、自今以後、宜改此弊、〇略、中就大藏省、依法平校、永絶姦源、若違此制、口實嚴科、
〔守隨家文書古今要覽所引〕分國中、以守隨秤、黃金可令商賣、若或用私之秤子、或於祚直輩者、可彼所罪科者也、仍如件、

天正十一年十月五日　　榊原小兵衛尉奉之

守隨彦太郎殿

〔守隨家文書古今要覽所引〕關東中秤目事、任天正十一癸未年十月五日先御判旨、如年來彌全可令沙汰之趣所被仰下也、執達如件、

慶長十九年　　對馬守　大炊助

守隨兵三郎殿

〔御定書百箇條〕似せ秤、〇略、中拵候もの御仕置之事、
寛保二年極　似せ秤拵候もの　上引廻之　獄門
但掛目遠無之におゐては中追放

〔享保集成絲綸錄三十四〕承應二巳年閏六月

一守隨善四郎二人之秤目、無相違被仰付候上ハ、六十六ヶ國に而用之遣可申事、

一東三十三ヶ國は守隨秤、西三拾三ヶ國は善四郎秤、直段無高下賣可申事、

附守隨秤、西三拾三ヶ國ニ而賣セ申間敷候、

善四郎秤、東三拾三ヶ國ニ而賣セ申間敷候、

若相違之輩有之候而賣候者於有之は、相定之通守隨善四郎互可改之事、

此趣今度被仰付候間、自今以後當御地之儀は不及申、東三拾三ヶ國之者共、此旨可相守、今迄持來候諸人秤守隨改、秤目不同之惡敷分ハ取上候、秤目能分ハ守隨ニ印を爲致、其儘遣可申候、印賃ハ秤一挺ニ付一分ヅヽ、守隨ニとらせ候、是又左樣ニ可相心得、善四郎秤遣度ものは、守隨ニ印を爲致可遣もの也、

閏六月

明曆元未年八月

一以前茂度々相觸候得共、町中ニ古秤隱置申由被聞召上、彌此度被仰付候間、此旨堅可相守候事、

一ちぎ、わた秤、皿秤、れいてんぐ、其外萬之古秤、于今於有之は、其町々ニ而吟味致、當月中ニ守隨方江月行事持參仕改させ遣可申候、勿論守隨秤之外つかひ申間敷事、

一旅人古秤之儀も右同前

右之通、町中家持之儀は不及申、借家棚かり下々迄念を入爲申聞、向後萬之古秤隱置申間敷候、若相背候者急度曲事可申付事、

八月

萬治二亥年六月

町中ニ而萬之秤、手前ニ而さを幷おもりを取替其上取結をも手前にて取替候由相聞へ候、向後左樣成儀、手前ニ而仕間敷候、附古秤遣申間敷候、自然緒切レ候歟、又は秤惡敷成候はヾ、御定之通守隨所江遣可申候、少茂相背候はヾ、曲事に可申付候、

六月

元祿元辰年十月

覺

一町中ニ惡敷秤有之由相聞、不屆ニ候、縱守隨方より仕出し候秤にても、後に拵直し、惡敷秤遣もの有之候はヾ、穿鑿之上、急度可申付候間、此旨相心得、惡敷秤堅遣申間敷候、以上、

十月

〔牧民金鑑十六〕享保六年四月晦日御書付

諸秤千木、新古ニ不限、修覆糸付等內々にて拵用候儀堅仕間敷候、此段向々へ可被相觸候、以上、

丑四月

寬保三年六月日御書付

金銀掛合候分銅、寬文年中、改以前之古分銅、兩替仲間にて遣候由相聞候ニ付、京大坂堺近江之分潰等迄、外にて賣買不致、潰直段を以、後藤四郎兵衞方へ買受させ、目輕き古分銅內々にて賣買致間敷旨度々相觸候處、今以西國幷長崎筋にてハ古分銅、多賣買いたし用候由相聞候、此已後內々にて賣買いたし候儀ハ勿論不隱置四郎兵衞方へ可相渡候、尤四郎兵衞より分銅改役人相廻り、紛敷分銅ハ取上候筈ニ候、其趣急度可相守者也、

寬保三年八月九日御書付

諸秤之儀古來より守隨彥太郎役人相廻改候處、近年ハ私事之樣ニ心得候哉、諸秤數多致所持候

者も、秤少々出し見せ、不宜秤ハ隱置、或ハ秤所持不レ致旨申改不レ請者も有レ之候樣相聞候、前以相觸候通、守隨方より役人相廻改候節、諸秤不レ隱置、不レ殘出し、改請候樣可レ致候、尤紛敷秤ハ、取上候筈ニ候、此旨急度可レ相守者也、

右之趣、東海道東山道北陸道幷丹波丹後但馬都合三十三ヶ國、御料ハ御代官、私領ハ地頭より可レ被レ相觸候、

寬保四年二月十四日御書付

神善四郎秤相用候國々へ、善四郎方より役人相廻秤改候節、秤數多所持之者も不レ隱置、不レ殘出し見せ、改請候樣可レ致候、尤紛敷秤は、取上候筈ニ候、此旨急度可レ相守者也、

右之趣、五畿內山陽道南海道西海道山陰道之內、因幡伯耆出雲石見隱岐、幷壹岐對馬、都合三十五ヶ國、御料ハ御代官、私領ハ地頭より可レ被レ相觸候、

寬保四年二月日御書付

神善四郎名代之者、爲レ秤改、西三十三國へ相廻り候ニ付、傳馬之儀、寺社奉行證文相渡遣候間、無滯可レ差出旨申渡候樣可レ被レ致候、右國々之儀ハ、寺社奉行可レ被レ承合候、

二月

延享五年五月十八日御書付

守隨彥太郎手代共、秤改國々へ相廻り候節、所々に於てかさ高成仕形、如何成儀共相聞候、以來右體之儀有レ之候ハヾ、彥太郎儀、急度御咎可レ申付條、相愼入念申付候樣、可レ被レ申渡候、

右之通、御細工頭へ申渡候間、爲レ心得可レ被レ達候、尤所々におゐて、かさ高成仕形、如何成儀共有レ之候ハヾ、領主より可レ申出候段、向々へ可レ被レ達置候、

五月

秤座

寶曆二年八月十一日御書付

諸秤之儀古來より、守隨彥太郎役人相廻改候處、近年ハ私事之樣ニ心得候哉、諸秤數多致所持候者も、秤少々出し見せ、不宜秤ハ隱置或ハ秤所持不レ致旨申改不レ請者も有レ之候樣相聞候、前以相觸候通り、守隨方より、役人相廻改候節、諸秤不レ隱置、不レ殘出し、改請候樣可レ致候、尤紛敷秤ハ、取上候筈ニ候、此旨急度可レ相守者也、

右之通、先年相觸候處、可レ取上秤も、守隨方へ不レ相渡場所有レ之、猥に秤賣買いたし、緒等も手前にて取替懸目不同之秤、遣候者も有レ之趣相聞不レ屆に候、前々相觸候通、守隨方役人相廻改候節、諸秤不殘改を請、西三十三ヶ國の秤、東三十三ヶ國にて通用無レ之、取上に相成候筋の秤、守隨方へ可レ相渡候、諸秤新古に不レ限、守隨方の外にて賣買致間敷、手前にて衡幷錘緒等取替申間敷候、若諸秤隱置改不レ請、猥に賣買致、或ハ手前にて衡幷錘緒等取替候者有レ之候ハヾ、急度咎可レ申付候、

右之通、先達て相觸候向々へ、猶又可レ被レ相觸候、

〔三貨圖彙〕京秤座、神ノ家ハ、本國ハ勢州ニ住也、慶長年ニ、大權現、二條ノ城へ登御ノ砌リ先祖豐後掾被レ召出、御目見ノ上、不レ相變京秤座免許ヲ蒙リ、御用被レ仰付、其後元和元卯年三月、駿府へ被レ召出、秤ノ義御赦免ニテ、善四郎一人ニ被レ仰付、○中略向後別人ノ秤用ヒ間敷旨、御代官衆へ被レ仰渡、其節諸秤可レ相渡旨蒙レ仰、依テ悉ク諸秤、御代官へ相渡候、嚴有院樣御代、明曆元未年、江戶表へ被レ召出、甲州金秤被レ仰付候古例モ有レ之ニ付、守隨彥太郎ヨリ相願、東國通用秤ノ義相願候ニ免許セラレ、此後東國西國、守隨神兩家ヨリ、秤ノ義ハ支配仕候樣被レ仰付、此以後ヨリ、兩家ニテ秤座相勤ル、

守隨彥太郎
神善四郎

但シ東三十三ヶ國
西三十三ヶ國

其後寛文八戊年、秤ノ御證文、右兩人へ被下置、其節屋舖地拜領ス、右御證文ハ、御代々被下置候、

神善四郎ニ條玉屋町

〔國花萬葉記一上城〕秤

〔華洛羽津根一〕秤座

夷川西洞院東

神善四郎

〔雍州府志七土產〕權衡　權衡斗量寸尺、天下所通用、而有少違、則大誤人、故近世被定其人、關西洛下善四郎所作權衡用之、關東江戸守隨所製用之、

〔甲斐國志二國法〕秤子

一江戸秤座守隨彦太郎代、甲府八日町ニ居住シテ、坂本清九郎ト云、本ト皆武田ノ秤子ナリ、神祖御入國ノ後、守隨ハ江戸ニ召サル、文書ノ寫五通、清九郎藏之、但清九郎原氏ハ長坂ナリ、後有故改今氏ト云、國ノ內秤杜秤等清九郎改之、

定

令在府御細工之奉公相勤候條、町棚壹間宛、商賣之諸役有御免許之由被仰出者也、依如件、

天正二甲戌閏十一月廿四日朱印　山縣三郎右兵衛尉奉之

守隨　鈴木清三郎

同與治郎　長坂善七郎

又一章ハ、天正四丙子年二月廿二日勝頼印書、同文言ナリ、

但シ釣閑齋奉之

守隨作吉川彦太郎三人名ハ同ジ、

朱印〇定

一町棚壹間宛諸商賣役之事

一利倍役之事

一宿次之諸役之事附人足之事

右三ヶ條之役、御細工之奉公相勤之間、一切被成御赦免之由被仰出者也、仍如件、

天正八年庚辰八月十六日

甲州秤子之事、如前候、不可有相違者也、依如件、

天正十一年十一月廿六日御朱印

守隨彦太郎殿

分國中、以守隨秤、黃金可令商賣、若或用私之秤子、或於拵置輩者、可被處罪科者也、仍如件、

天正十一年十月五日

守隨彦太郎殿

〔三河後風土記二十八〕三浦三崎番附守隨町年寄之事

同年十〇天正十八年九月十二日、〇略中其頃甲州にて、秤商賣せし守隨兵三郎といへる者、關東御入國と聞、早速甲州より江戸に來り、多門傳八郎にゆかりあれば、傳八郎を頼み、井伊直政へ願ひ、關八州權衡を掌らん事を申出る、神君彼はるゞ〳〵甲州より早速參たるを御稱美にて、直に願の通御免有て、御朱章をぞ下されける、

釣閑齋奉之

吉河彦太郎

鈴木清三郎

同與治郎

長坂十左衛門尉

榊原小兵衛

神谷彌五助奉之

榊原小右兵衛尉奉之

自今以後御分國以守隨秤可令黃金諸色商賣者也仍如件、

天正十八年月日御朱印

守隨彥太郎日本橋南四丁目

十俵二人ふち　京橋具足丁　守隨彥太郎

十俵二人フチ　日本橋はくやち丁　守隨彥太郎

〔國花萬葉記七武藏〕秤

〔寶曆十四年〕大成武鑑三〕御秤所　御細工所頭支配

〔慶應二年〕大成武鑑三〕御秤所

〔經濟錄四律曆〕日本ノ古ノ秤ハ、如何ナル制ナリシト云コト詳ナラズ、當代ハ京都ト東都ト兩處ニ官局ヲ立テ、京都ハ神氏、東都ハ守隨氏ニ命ジテ大小ノ秤ヲ作ラシメラル、東國ハ守隨ノ秤ヲ用ヒ、西國ハ神氏ノ秤ヲ用フ、民間ニテ私ニ秤ヲ作ルコトヲ許サズ、秤ヲ作ルコトヲ得ザルノミナラズ、秤ノ少ニテモ損ジタルヲ私ニ修補スルコトヲモ許サズ、又神氏ノ秤ヲ東國ニテ用ヒ、守隨氏ノ秤ヲ西國ニ用ルコトヲモ許サズ、若此法ヲ犯スモノアレバ、兩局ノ徒見ツクルニ隨テ、其秤ヲ奪取テ、衡ヲ折テ棄ル、是國家ノ法令ニテ、制禁甚嚴ナリ、度量衡ノ三ツノ中ニテ、只此法ノミ至テ嚴密ナリ、秤ハ微細ナル物ニテ姦ヲナシヤスキ故ナルベシ、誠ニ謹權量ヲトノタマヘル孔子ノ聖語ニ合テ、自出度法令ナリ、

〔倭名類聚抄十四權衡具〕權衡　廣雅云、錘音垂謂之權和名、波加利乃於毛之、

〔伊呂波字類抄波〕員數、錘ハカリノオモシ八稱曰レ錘、又謂二之權一稱、

〔節用集波〕錘カリノヲモリ

〔書言字考節用集七器財〕權ハカリノヲモリ　廣雅、錘謂二之權一稱レ之錘

〔藻鹽草十七調度〕秤　秤の石かけいれのはかりもこいしは民のうれへあらじなし

〔東齋隨筆政道〕延久〇後三條善政には、先器物を作られけり、〇中略舟器は方なる櫓を差す、石をくゝりて下でおもしにして、二またの木に懸て、穀倉院にして、國々の米をば納られけり、

〔商人職人懷日記二〕信州に涌出る金のべ、澤の金山最中の時分、賑はしきに目とまり、萬見めぐるに、〇中略葉たばこは賣て、きざみ賣なきゆゑか、闇しき中に手々に菜切にして、あたら莨菪を粉灰にするを、是はと思ひ寄、合口斗殘りしを賣て、うすば一丁、たばこ壹斤求めて、竹のはかり、石のおもりして、小屋々々を賣あるく、

〔書言字考節用集七器財〕分銅ブンドウ又作二一等一、本名法馬、

〔古今要覽器財〕天平

天平は、江戸に六百四十餘あり、是兩替屋の法器にして、私ならぬものなれば、他に用ゆることをゆるさず、その法は、卽明の天平を張介賓類經用ゆるなり、法馬は五百匁より三百匁二百匁百匁にいたり、五十匁より四十匁三十匁二十匁十匁まで、五匁より四匁三匁二匁一匁まで、五分より四分三分二分一分迄、合せて廿一あり、この法馬は後藤の製する所にして、盤と針口とは中堀與十郎といふもの、製する所なり、

張介賓類經　秤有二大小一、擬二古天平法馬數一、則蓋天平之始尙矣、天平今云針口法馬今云分銅卽權錘之本也、衡之左右設レ盤而法馬與レ物、相二秤輕重一、針口平均不二齟齬一爲レ準、見二法馬數知一幾等目一、

〔三貨圖彙一〕今ノ秤ノ目、一文目ハ、開元錢一則開元錢ヲ法トス、今後藤家ニテ造ル分銅、十匁ハ、銘ニ一兩トアリ、兩目ハ十兩、五百目ハ五十兩トアリ、皆唐ノ制ニヨル歟、右分銅ノ制、何レノ世ヨリ起ルト云コトヲ不レ知、〇中略今義解ニ凡用度量權衡、官司謂大藏省及諸國司之類皆給レ樣、其樣皆銅爲レ之トアリ、今ノ分銅ノ形ノ物ナルヤ、右樣ノ分銅秤ハ世ニ存セズ、仍テ其形ヲ不レ知、今造ル所ノ分銅秤ハ、慶長年中、神祖ノ命有テ、今ノ座方ノ祖ニ造ル事ヲ免許セラル、分銅ノ形、如レ今表ニ兩銘アリ、裏ニ後藤家極印有ト云、按ニ慶長時代ノ秤ニ、寶盡シ、或ハ秋ノ野ニ蝶ナドノ模樣有レ之秤アリ、コレ等ハ諸侯ノ好ム處歟、右ノ

分銅モ此類ナラン、併シ慶長以前メコトハ不知、元和以來寛永ノ頃ノ分銅ハ如今ナレドモ、美銅ニシテ彫銘モ正シク、黃唐銅ト云ガ如シ、今用ユルトハ制至テ精シ、〇略中此分銅、大坂ニテハ十人兩替ノ者、寛文年以來所持シ仲間ノ新分銅、是ニ合セテ輕重ヲ量リ、於會所月々立會改之、是ヲ樣見セ新分銅ト云、元文年中、後藤家ヨリ、諸國分銅改ノ時、是ヲ取上ゲ潰シトス、仍テ今其古物世ニ存セズ、秤ハ猶古物世ニ殘リテ、今モ座方ノ改ヲ請テ用ユルコトヲ免ス、〇略中今海內用ユル所ノ分銅是又後藤家ヨリ造リ出ス、併シ元和年前後、一統ナラザル時代ハ、右分銅モ民間ニ數ナク、依テ士民私ニ分銅ヲ造リ、極印ナクシテアリテ是ヲ用ヒシナリ、漸ク治世ニ及ビ寛文五年、始テ公ノ制令料ヲトリ、其儘ニ通用セシトナリ、

〔古今要覽器財〕權の形

今に載する權の形、定かに傳へたるものなし、職人盡歌合にみえたるものは、全く今の秤とおなじ、守隨彥太郎云、慶長の比は、未極印を用ひず、その〻ち代々實名の極印を打たりしゆゑに、先代の錘をあらたむる時は、實名の一字、或は歸納の字を以て、小圓印として、打添る事となりたり、四代目の彥太郎正得以來、實名の極印正得の字あり、是を守隨に質すに、四代目彥太郎正得が、し錘あり、二代目彥太郎の錘なるよしいへり、

又秤に天下一と銘せし秤あり、その極印も天下一の號は、けやけきことなりとて改めたりといへども、公より停められたるにはあらざれば、今もたま〳〵天下一の秤をもちきたる事あれども、直しつかはずといへり、

〔日本永代藏五〕朝の鹽籠夕の油桶

町人は算用こまかに、針口の違はぬやうに、手まめに當座帳付べしと、金の有德人の、あまたの子どもに申わたされける、

〔好色一代男四〕火神鳴の雲がくれ

奧ふかなる家にて、天秤はり口の響き、さもしくも耳に入て、〇略下

〔三貨圖彙一〕御本丸又西ノ御丸へハ、毎年拜禮ニ罷出、御目見ノ節、御香具秤ト云ヲ獻ズルヲ例トス、〇中略皿、オモリトモ銀、

〔藻鹽草十七調度〕秤　一さほともよめり

〔書言字考節用集七器財〕權衡（カリノサヲ）

〔令義解九關市〕凡用稱者、皆懸於格、謂稱者稱二量輕重一也、格者橫木所二以懸一稱也、

〔勘者御伽雙紙中〕はかりの錘の重さをかけすしてしる事

はかりのさほばかりをみて、其をもりの重さをしるは、末のごり緒より皿緒までの寸を取て、其寸をむだ目より末の方へくらべて、其あたる所よりむだ目迄の目、卽錘のおもさ也、又中の取緒より皿緒までの寸をとりて、前目にあてゝしるも同事也、さりながら中と本の取緒は、寸みじかくして、少しのちがひみえず、故に末の取緒にて考べし、

〔令義解九關市〕凡用稱者、皆懸於格用解者、皆以概、謂稱者稱二量輕重一也、格者橫木所二以懸一稱也、概者量所二以平一斗斛一也、粉麵則稱之、

〔類聚三代格八〕太政官符

應諸司納米用秤事

右出納明察、載在法令、而頃年廊院大炊納米之日、未必概量、下用之時、量欠稍多、斯則因檢納諸司不存覆量也、宜自今以後本司先每俵概量、已知無行濫、然後申官收之、但諸司檢納之時、不更概量、曾用權衡、若有行濫及量欠、必令本司備償不曾寬宥、

承和十一年十一月二日

〔新撰姓氏錄左京皇別下〕商長首　上毛野同氏、多奇波世君之後也、三世孫久比、泊瀨部天皇（謚雄略崇峻）御世、被遣吳國、口雜寶物等獻於天皇、其中有吳權天皇勅此物也、久比奏曰、吳國以懸定萬物、分爲交易、其名云波賀理、天皇勅之、勿令他人用、久比男宗麻呂、舒明天皇御代、負商長姓也、日本紀漏、

〔扶桑略記舒明〕十二年庚子、始定斗升斤兩、

〔續日本紀文武二〕大寶二年三月乙亥、始頒度量于天下諸國、

〔續日本紀元明六〕和銅六年四月戊申、頒下新格幷權衡度量於天下諸國、

〔書言字考節用集器財七〕盤秤（サラハカリ）又云銀秤（ギンノハカリ）

〔書言字考節用集器財七〕合秤（アハセハカリ）奴隸分（ヌレイノ）所レ用

〔類聚名物考調度二〕秤　はかり　ちぎ　俗言（ゾクゲン）れいいてんぐ

杠秤（チビ）ハ大秤なり、鍵の付たるを云なり、れいいてんぐとは、銀秤の事にて、薩等具の轉語にして、薩だめともいへり、毫釐を正すのはかりなり、

〔雍州府志土產七略〕權衡　中　權衡倭俗稱禮伊氏牟具、中華人今謂厘厘等具、倭俗禮伊氏牟具、誤厘厘等具者乎、

〔守隨家文書古今要覽所引〕甲州金秤子之事、如前々不可有相違者也、仍如件、

天正十年十一月廿六日

守隨彥太郎殿

榊原小兵衛

神谷彌五助奉之

〔書言字考節用集器財七〕天平（テンピン）所レ呼唐音

〔雍州府志土產七略〕天秤　泉南針口屋製之、其餘流々五洛下賣之、法馬後藤家製之、俗所謂分銅也、

〔人倫訓蒙圖彙六〕天秤（てんびん）　堺よりいづるを上とす、代十一匁又は十二匁なり、針口（はりくち）京兩替町堺（さかひや）與三兵衛、御池通與十郎、松原室町與三左衛門、大坂今橋筋にあり、代九匁又は十匁、分銅法馬と號す、小川通舟橋後藤四郎兵衛江戸白銀町三丁目にあり、大坂本町一丁目新左衛門、一組代廿五匁也、五百目分銅壹ツにて代十五匁なり、

〔川角太閤記五〕一牢人ばら、即時に相集候と伺候へば、人數に應じ銀子を渡せよとて相渡候、其樣子を如水（黑田）見候に、座敷にて天秤二丁三丁にて掛渡候處に、奉行抔を呼付、我ははや老後に及候間、箇樣成事は、我代には重て有間敷候、

〔日本永代藏二〕怪我の冬神鳴

大津の町に、醬油屋の喜平次といふ者有ける、（略）中客の遊興、晝夜のかぎりもなく、天秤のひゞきわたり、金銀も有所には瓦石のごとし、

〔享保集成絲綸錄三十四〕正德元卯年十二月

覺

一秤之直段貳匁相增、向後壹挺ニ付五匁五分宛賣渡、修復之直段は不相增候間、此旨町中不殘可觸知者也、

十二月

正德四午年正月

秤增直段之覺

一れいてんぐ　壹挺　壹挺ニ付直段三匁五分、卯年ゟ直段五匁五分、

一釐直秤　壹挺　壹挺ニ付直段五匁、卯年ゟ直段七匁、

一小直秤　壹挺　壹挺ニ付直段三匁、卯年ゟ直段五匁、

一綿〇秤　壹挺　壹挺ニ付、昔直段六匁、卯年ヵ直段八匁、七分

一大〇引通綿〇秤　壹挺　壹挺ニ付昔直段九匁、卯年ヵ拾壹匁、

一大〇皿〇秤　壹挺　壹挺ニ付昔直段八匁、卯年ヵ直段拾匁、六分

一中〇皿〇秤　壹挺　壹挺ニ付昔直段六匁五分、卯年ヵ直段八匁六分、五分

一小〇皿〇秤　壹挺　壹挺ニ付昔直段五匁、卯年ヵ直段七匁、段ニ不レ及候

一千〇木〇三〇拾〇貳〇貫〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段三拾匁、卯年ヵ三拾貳匁、

一千〇木〇貳〇拾〇六〇貫〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段貳拾五匁、卯年ヵ直段貳拾七匁、三匁

一千〇木〇拾〇六〇貫〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段拾五匁、卯年ヵ直段拾七匁、六匁

一千〇木〇拾〇壹〇貫〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段拾貳匁、卯年ヵ直段拾四匁、壹匁

一千〇木〇六〇貫〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段七匁、卯年ヵ直段九匁、五分

一千〇木〇三〇貫〇五百〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段四匁五分、卯年ヵ直段六匁五分、段ニ不レ及

一千〇木〇貳〇貫〇目〇掛　一挺　壹挺ニ付昔直段三匁五分、卯年ヵ直段五匁五分、右同斷

秤直段之儀、向後右張紙之通相成候間、此旨町中可二相觸一者也、

〔古今要覽器財〕今所レ用秤

黒〇銀〇秤　元目積出、五拾目ヵ　中緒拾匁ヵ

角〇銀〇秤　同上　上目壹分ヵ

繼〇銀〇秤　同上

大〇直〇小〇秤　上目壹分ヵ

元目四文目ヵ　長〇厘〇直〇秤　上目壹ヵ

元目壹文目ヵ　小〇蘆〇直〇秤　上目壹蘆ヵ

元目五分ヵ　拾〇兩掛〇秤〇引通緒　上目壹分ヵ

元目壹分ヵ　小〇直〇秤　上目壹兩ヵ

壹分ヵ四文目迄　同〇目〇無〇秤

壹分ヵ壹兩迄　貳〇分〇掛〇秤

二分銀二兩二分迄　大〇皿〇秤　上目壹ヵ

元目五百目　中〇皿〇秤　中緒百目

元目百目　小〇皿〇秤　中緒五十匁

元目百目　中緒十匁　上目壹ヵ

綿秤
元日五百目　中緒百目
大引通秤　上目壹分
同上
小引通秤
綿秤同
三拾二貫秤
元目十貫目　上目百目
貳拾六貫秤
元目五貫目　上目百目
拾六貫秤
同上
拾貫秤
元目貳貫目　上目五十目
六貫秤
元目壹貫目　上目二十目
三貫五百目秤
元目壹貫目　上目十分
貳貫秤
元目五百目　上目十分

壹貫六百秤
元目五百目　上目十分
壹貫秤
元目貳百目　上目貳分
中直秤
二重秤
入子秤

〔三貨圖彙〕御本丸、又西ノ御丸へハ、毎年拜禮ニ罷出、御目見ノ節、御香具秤ト云ヲ獻ズルヲ例トス、此秤、

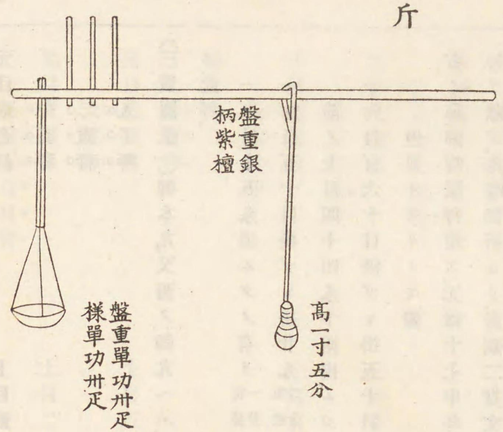
一上目十五分掛ムタメ有リ（但星一ツ一分ヅヽ）
一前目五十目掛ヅヽ掛廿分（但星一ツ二分ヅヽ）
前ノ上目四十四分十兩掛ムタメ有（但星一ツ二分ヅヽ）
一向目百六十目掛ヅヽ掛五十目（但星一ツ七匁五毛ヅヽ）
但皿オモリトモ銀

右ノ節、御時服拜領ス、元祿十七申年ヨリ、隔年拜禮、又禁裏御所へモ、年頭八朔ニ御禮相勤、御香具秤ヲ獻ズ、此時御所ヨリ、靑銅二貫文ヲ例トシテ被下置、此香具秤ト云ハ、

一上目五十目掛ムタメ有（但星一ツ二分ヅヽ）
上ノ前目四十四分十兩掛ムタメ有（但星一ツ二分ヅヽ）
一前目百六十目ヅヽ掛五十目（但星一ツ七匁五毛ヅヽ）
一向目五十目ヅヽ掛百目（但星一ツ十分ヅヽ）

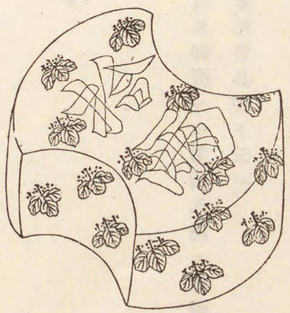
〔類聚雜要抄〕

斤

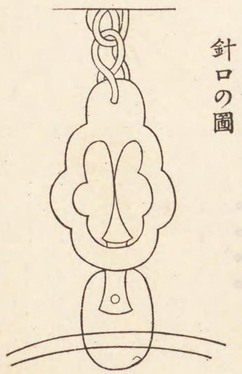


〔古今要覽 器財〕

法馬の圖



針口の圖



〔七十一番歌合〕

菓物うり

〔人倫訓蒙圖彙〕　秤師

〔延喜式三十七典藥〕寮家儲物　稱一箇

〔延喜式三十九内膳〕凡量年中所供雜菜停斗用稱其斗斛所准本司與受物所司相共量定

〔日本靈異記下〕重斤取人物又寫法華經以現得善惡報緣第廿二

他田舍人蝦夷者信濃國小縣郡跡目里人也○略○中寶龜四年癸丑夏四月下旬蝦夷忽率而死○略○中死經七日而甦告言○略○中于時僧言校札之者實如汝曰敬寫三部法華大乘也雖寫大乘而作重罪所以者何汝用斤二出擧之時用於輕斤故召汝耳○略○下

〔台記〕久安六年九月廿六日己亥禪閤○藤原忠實曰攝政○忠實長子忠通之由數度云々許度非唯無許諾亦有不義之報命是以將絕父子之義攝政者天子今媚諂暗可讓攝政之所授我不得奪之氏長者我所讓無有勅宣然則取長者官授爾何有所怖憚矣余○忠實次子賴長且諫且辭禪閤不聽卽召仲行賴賢仲賢等仰可取出長者官渡庄券朱器臺盤權衡等之由○略○中戊時有成朝臣持來朱器等授祿謝之

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし七條に薄うちあつかひといふ者ありみたけまうでしけり、まゐりてかなくづれをゆいてみれば、まことに金の樣にてありけり、うれしく思て件の金を取て、そでにつゝみて家にかへりぬ、おろしてみければ、きら〳〵としてまことの金なりければ、ふしぎの事なり、此金これば、神なりちしん雨ふりなどして、すこしもえこらざんなるに、これはさる事もなし、この後も此金をとりて、世中をすぐべしとうれしくて、ばかりにかけてみれば、十八兩ぞ有ける、これをはくにうつに、七八千枚にうちつ○略○下

〔古今和歌六帖五〕はかり

かけつれば千々のこがねもかずしりぬなぞ我戀のあふはかりなき

今こんといひしはかりにかけられて人のつらさの數はしりにき

〔後撰和歌集十四戀〕心ざしをばあはれと思へど、人めになんつゝむといひて侍ければ、よみ人しらず

あふはかりなくてのみふる我こひを人めにかくることのわびしさ

〔新撰和歌六帖五〕はかり

民のとに秋をさめするいなはかりとしあるみ代をかけてしるらし

〔赤染衛門集二〕地ごくるゝに、はかりに人をかけたるをみて、

つみはよにおもきものぞときゝしかどいとかはかりはおもはざりしを

〔源順集〕同年〇應和二年十二月、前朱雀院の姫宮の御もきのひのれうに、御屏風調せさせたまふ、人々歌たてまつらせ玉ふ歌、青柳、

露をおもみたえぬはかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらん

編修總裁　正三位　細川潤次郎

編修　正七位　文學博士　佐藤誠實

副編修　松本愛重

助修　石井小太郎

助修　加藤才次郎

助修　山本信哉

助修　馬瀬長松

助修　和田信二郎

顧問　從四位　文學博士　黒川眞頼

顧問　正五位　本居豐穎

顧問　從五位　木村正辭

顧問兼校正　井上頼圀

明治三十二年七月十二日印刷
明治三十二年七月十七日發行
版權所有

神宮司廳

サ1G4-40

昭和三年四月二十日印刷
昭和三年四月廿五日複刻發行

神宮司廳藏版

發行者　京都市上京區一條通衣笠園
　　表現社內　古事類苑刊行會
　　右代表者　後藤亮一

印刷者　東京市芝區金杉新濱町十二番地
　　單式印刷株式會社
　　右代表者　和田助一
　　製本責任者　岩田幸次郎

發行所　京都市上京區一條通衣笠園
　　表現社內
　　古事類苑刊行會

發賣所　東京市京橋區鈴木町十二番地
　　吉川弘文館